

---

# 死亡届

北川瑞山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死亡届

### 【Nコード】

N7573R

### 【作者名】

北川瑞山

### 【あらすじ】

出来損ないの兄、優秀な弟。

二人が命を絶った理由は同根であった。

二人の取り交わした遺書を追う事でその理由、ひいては偏差値教育の弊害が明らかに。

俺はこの歳で初めて知ったんだが、死亡届っていう書類は自分では提出できない書類らしいな。自殺する人間にとっては迷惑千万な話だ。俺はなるべく他の人間に迷惑をかけずに死にたいから、前もってそれを提出しておきたかったんだが、どうやらそれは叶わぬ望みらしい。だからそれをこの手紙でお前に依頼したい。俺の実の弟で、唯一の理解者であるお前にな。死ぬ直前になって思い出すのは、お前の事ばかりだ。いや、正直に言えばそれは全部自分の事なんだが、自分の事を思い出すと、どうしてもお前の事を思わずにいられない。こんな兄を持ってさぞや苦労した事だろうってな。そして今また俺はお前に苦労をかけようとしている。全く最後まで駄目な兄だったな。許してくれ。そんな思いを込めてこれを書いている。遺書なんてのは大方死体の脇に置いてあるもんだが、俺はお前にだけ読んでほしいから、お前にこれを送るよ。

それはそうと、死亡届には死因を書く欄があるんだってな。そんな事を聞いて、一体何に使うつもりだろうか？心臓が止まった事さえ分かれば充分だろうが。死亡届で死んだきっかけを聞いたら、出生届で生まれたきっかけも聞かねばならん。八八、「正常位」とか「後背位」とか、きつと興味深いデータが得られるに違いない。俺みたいに自殺の場合は何って書くのかな。「自殺」の一言で済ませられればいいが、もしその理由を聞いているのなら、それはそう簡単に一言で済ませてもらいたくないもんだ。まあそれは何だって良いさ。要するに、世間の意識の中では生まれる事は自然で、死ぬ事は異常という感覚なんだろうな。生まれた事には無条件で「おめでとうございます」と言ってしまうし、死んだ事にはいかに悲愴な顔で「え？何で？」と聞く。俺にしてみれば全く逆なんだがな。

そんなことより、思い出話を思いつくままにここに書かせてもらおうと思う。自分の人生を振り返るっていう意味もあるし、何より

自殺の理由をお前に理解してもらうためには、俺の生い立ちから話さねばならん。少し長くなるかも知れんが、目を通してもらいたい。

俺らの家族は、俺を除けばおおよそ優等生ばかりだった。お前は勿論だし、親父も大銀行の幹部やら投資ファンドの社長やらを歴任していた。おふくろもモデルの様に長身で、頭も運動神経もいい。しかもそれでいて完璧な良妻賢母だった。つまり家族の中で俺だけが出来なすだった。生まれつき体が小さくて、しかも太っていたし、勉強も運動もまるで駄目だった。言わば一家の廃れ者ってやつだ。それを俺が初めて自覚したのが、俺とお前が幼稚園のときだった。俺が年長でお前が年少だった。運動会の時に妙なゲームをやらされた。年長と年少が一緒になって輪になる。その輪の中に玉入れの玉が人数より一つ少ない数だけ置いてある。それを合図とともに一齐に取りに行く。当然一人だけ取れない奴がいて、そいつが輪の中から抜けていくんだ。もう思い出したかも知れないが、五十人ほどいる園児の中で最初に玉を取れなかったのが俺だった。俺は園児達の輪の中で一斉に嘲笑を浴びた。周りの父兄達も笑っていたっけな。この出来事は未だに俺の中でトラウマになっている。このイベントを企画した奴はこうなる事を予期していなかったのか？幼稚園の先生というのは馬鹿なのか？未だに思う。ともかく自分が劣等生である事を俺はこの時初めて自覚したんだ。自分の兄がそんな目にあっている、弟のお前はどんな気持ちでそれを見ていたんだろうな。胸が痛むよ。

そんな俺は小学校に上がって、当然の様にいじめられるようになった。お前が入学して来た時には、もういじめられっ子のキャラが定着していた。もっともキャラなんてものは他人が勝手に作り上げるものだから、本人の意思を全く無視している。当然いじめられキヤラだからいじめていいなんていう道理はないんだが、世の人間にはそんな道理も通用しないらしい。お笑い番組の見過ぎだと言っておこう。朝お前と一緒に登校すると、下駄箱で靴を履き替える時から俺はクラスメイトから罵倒されていた。俺はもう慣れっこだった

から無視していたが、お前は果敢にそんな上級生相手に怒鳴り返していた。俺はそんなお前を置いて一人すごすごと教室に入っていく事しか出来なかった。ああ、今思い返すだけでもお前に謝りたい気持ちで一杯になる。悪かったな。当時俺の味方をしてくれたのはお前だけだった。親父もおふくろも劣等生である俺の事を煙たがって特殊学級に入れようとしていたし、学校の教師などはいじめられている俺を見て、

「あなたが可愛いからやっているのよ」とか、

「特別扱いされるのはありがたい事なのよ」

等と言つて、人の痛みを理解しようとしなかった。全く教師といふのはおおよそ無能な人間の集まりらしい。

お前はそんな兄を持って悔しく思ったのか、勉強でもスポーツでも人一倍頑張っていたっけな。劣等生の俺の弟である事が嘘の様に、お前は優等生だった。まるで映画の『ツインス』に出てくる双子みたいだな。全ての才能が弟の方にだけ行ってしまったという。

俺らの正反対さで言えば、小学校の学芸会の時の事が特に印象的だ。お前はクラスでも人望が厚かったから、学芸会の演劇でも主役を張っていた。確かピーターパンの役だ。緑の帽子を被つてステージで独唱するお前は実に輝いていた。両親も鼻が高かつたろう。それに対して俺がやったのは『桃太郎』だったんだが、俺の役というのがこれまた酷い役だった。桃太郎が鬼退治をした後、お大臣が出て来てこう言つた。

「これは勇敢な若者が現れたものだ。そなたを私の用心棒として召し抱えよう」

俺はそのお大臣のお供の役だった。お大臣の台詞に続いて一言、「ごもつとも！」

と叫ぶのだ。台詞はこれしかない。桃太郎にこんな登場人物がいたかどうか疑問だが、一番気がかりだったのは俺らの両親はその時どんな思いでビデオカメラを回していたのかという事だ。そんな訳

で俺は両親にも謝らなければならぬ。

まあ小学生の頃は俺もお前もそんな感じで過ぎていった。中学生になっても、その構図はあまり変わらなかつた。けれども俺にとつては転機が訪れた。俺は音楽に目覚めたのだ。何の希望もなかつた俺には、それは一筋の光の様に感じられた。お前も知っているだろうが、俺には唯一の特技があつて、それは他でもないピアノだつた。馬鹿で鈍くて品のない俺がかつてはピアノを弾いていたと知つたら大概の人間は驚くだろうな。だがその頃の俺は純情な少年だつたんだ。生きづらい憂鬱な世界も、ピアノを弾いているときだけは忘れる事が出来た。俺にはこれしかない、一人でずつと思つていた。俺が何一つ満足に出来ないのは、全ての才能が音楽に偏つてゐるからだ。と妙な帳尻合わせをしたものだ。その頃のお前は学年でもトップクラスの成績で、サッカーで全国大会に進出する程の活躍をし、生徒会長なんかもやってたつけな。しかし俺はそんな事はちつとも羨ましいと思わなかつた。俺にはピアノがあつたからだ。それどころかお前が両親を安心させてくれていたお陰で、俺は心置きなくピアノに没頭できた。

しかし現実には厳しい。俺にも進路の問題は避けて通れなかつた。教師との二者面談の日だ。あのときの事は今でも忘れない。

「将来就きたい職業は？」

と担任の女教師が聞いてきたので、俺は迷わず

「ピアノリストです」

と答えた。そうしたら即座に、

「夢を見るのはよしなさい」

と返つて来た。そしてその後の女教師の発言が俺の中で長い尾を引く事になった。

「あなたの様に特徴のない人は、公務員になりなさい」

お前だつて公務員だろうが、と言つてやりたかつたが、まあ奴の言いたい事も分らない。公務員ほど安定した職業はないし、無能な人間でも解雇される事なくやっていけることは奴自身が身を

以て証明している訳だ。だが俺に特徴がないとはどういう事なのか、俺にはさっぱり分からなかった。ピアノが弾けるといふのは特徴ではないのか？俺はその後考えたんだが、奴の言う特徴というのは結局飯の種になる特徴であつて、夢を見るための特徴ではないという事なんだろう。要するに金を稼ぐという前提が先にあつて、その上で自己の特徴を考えろという事だ。人間の特徴は必ずしも経済活動に沿うものではないと思うんだが、確かに金がなきゃ人は生きられない。俺はどうやら考え方を誤つていたらしい。そう思い直して、俺はとりあえず真面目に勉強をしてみる事にした。これが今思えば間違ひだった。真面目にやってみたら、俺の成績は少しではあるが良くなつた。勿論お前から見れば大した成績じゃあないだろうが、それでも試験で人並み程度の点数は取れるようになった。それに気を良くした俺は、その後特に何も考えずに普通科高校に進学した。全く馬鹿な事をしたもんだ。この時に安易に道を決めずに、もつと悩み抜くべきだったんだ。

高校は一学年の人数が五百人以上いるマンモス校だった。まあ偏差値は中の下といったところだ。スポーツの盛んな高校で、スポーツ推薦で入つて来た連中がやたら幅を利かせていた。あの脳みそ筋肉野郎どもにいじめられた事のない奴なんていないんじゃないか。俺はその頃からスポーツ番組を見なくなつた。しかし俺の様に普通に勉強で入つて来ている人間は、高い学費を払つて奴らに投資している様なもんだつた。だだっ広い野球場やらサッカーグラウンドやらトレーニング施設がある割には、一般の学生は冷暖房もない部屋でボケた爺さん先生の授業を受けていた。質実剛健の美名の下には何百何千という犠牲者がいた訳だ。

それだけなら良い。俺ら一般の学生は勉強して何とか大学に進学するしか道がない。だが俺を含め大多数の人間は勉強が得意でない人間ばかりだ。アホな高校だからな。そういう中で運良く大学に行けたとしても、大した大学じゃなからう。そしてその後には就職活動に苦戦し、やっと入つた会社ではこき使われて一生を終えるんだ。

もうある程度先が見えちまつてるんだよな。そういう閉塞感の中で勉強する事は並大抵でない。モチベーションなんて上がらないに決まつてる。モチベーションと言えば、それを最も下げたのが、やはりスポーツ野郎の存在だった。奴らは学校で威張り散らす上に、卒業するとプロになって年俸何億と稼ぐ。そうならなかった奴でも、大抵はスポーツ推薦で俺らよりも良い大学に行く。女どもは挙つてそんな奴らに尻尾を振る。そんなものを毎日見せつけられてると、真面目に勉強するのが馬鹿馬鹿しくなつちまうんだ。

「人と比べてもしょうがない」

「皆努力してるんだ。お前も偉そうな事を言う前に努力しろ」

とかいうお説教が聞こえてきそうだな。だがそう言う奴も同じ立場に立たされたらどう思つか知れたもんじゃない。それに俺は一応努力はした。学年ではいつも二番の成績だった。どうしても一人だけ勝てない奴がいて、そいつと俺は放課後残つて一緒に勉強するほどの仲だったんだ。ある日俺はいつもの様にそいつと放課後の図書室に行つて、一緒に赤本を読みながら大学の研究をしていたんだ。そしてたらそいつが唐突にこんなことを言った。

「俺は本当はこんな高校に来たくなかつたんだ」

「ほう、それはどういふ事だ？」

と俺が聞いてみると、

「俺は中学の頃、ずっと成績優秀だったんだ。ペーパーテストの方はな。しかし事あるごとに教師とぶつかつていたせいで、内申点が悪かった。恐らくそれが響いたんだろう。公立高校に落ち、こんな訳の分からない私立高校に来てしまった」

「ほう、それは気の毒にな」

中学の教師など、あんな無能な連中に気に入られなかつただけで人生を格下げされちまうんだ。考えてみればこんなに気の毒な話はない。

「だから」

奴は言う。

「俺は大学受験で逆転して、教師の力など借りなくても成功できる事を証明してやりたいんだ」

「ほう、頑張れよ。応援してるぜ」

俺はそいつの気持ちは何となくわかって、本心からそれを言ったんだ。

ところが次の日、そいつはその反抗的な性格が災いしたのか、野球部の連中に暴力を振るわれて、その次の日に自殺しちまった。俺がそれを知ったのは、自殺する前日にそいつが俺に電話をよこした時だ。奴が事の顛末を話、最後にこう言った。

「俺はもうこんな世の中では生きていけない」

冗談だと思っていたら、ほんとに死にやがった。学校はそれを隠蔽したし、あるう事か暴力を振るった主犯格はその年に甲子園で大活躍をしてマスコミにもてはやされ、今もプロとして活躍してる。全く浮かばれない魂だぜ。もっとも俺もその時一緒に死んじまえば良かったと、今となっては思うんだが。

何だか愚痴っぽくなっちゃったが、遺書なんてものは所詮捨て台詞だ。愚痴っぽいのは勘弁してくれ。

俺は自殺こそしなかったが、やけくそになって非行に走った事はあった。近所のエロビデオ屋で、二本ばかり失敬しようと企んだんだ。万引き防止用のタグも外して、シャツの中にそいつを潜り込ませ、完璧だと思って外に出たら、そこに店長が待ち構えていた。

(俺の人生は終わったな)

とその時思った。敵つい顔をした店長にドスの利いた声で

「おい、全部見てたぞ。とりあえず中で話を聞こう」

と言われた時に、俺は気が動転して

「あ、僕これからピアノの習い事があるんで」

なんていう意味の分からない苦し紛れを吐いたっけ。ピアノを汚してしまったなんて思わなかった。その頃はもう俺にとってピアノはその程度のものでしかなかった。ピアノからは長い間遠ざかった。中途半端に夢を追うくらいならすっぱり諦めちまった方が楽だった

んだ。

結局その時は母親が呼ばれた。俺が盗んだエロビデオを前にして母親が頭を下げるのを見て、惨めに思った。その後俺は両親に散々説教をされてうなだれてたんだが、

「お前はそんな事だから何をやってもうまくいかないんだ」

というのだけは原因と結果が逆だと思ったな。まあどちらにしても両親にとって大した違いはない。学校に連絡をされずに退学を免れたのが不幸中の幸いだった。いや、今思えばあそこで全てリセットされていた方が良かったのかも知れない。現に今俺はこうして死ぬとしてるんだからな。

しかしお前には本当に迷惑をかけた。あの頃のお前は県内でも有数の進学校に入学し、順風満帆の高校生活を送っていたのに、俺のせいで家庭の雰囲気ガスガスしちまった。両親は俺を見捨てて、その分お前に過度な期待をかける様になり、お前は好きだったはずのサッカーを辞めて勉学に励まなければならなかった。全て俺のせいだ。こうして思い返しても、やはり俺は生まれてこなければ良かった人間だ。それなのにお前は、

「兄さん、善悪の概念など極めて相対的なものだ。窃盗や殺人が善となる場合だってある。その中で兄さんの行いがたまたまこの国では犯罪だったに過ぎない」

と慰めてくれた。それだけじゃない。日頃からお前は自分の愛読書を勧めてくれたり（俺には読書の習慣などなかったから最後まで読み通せなかったが）、時には俺に受験用の参考書をくれたりする事もあった。俺を見捨てる事なく、暖かく接してくれたのはお前だけだったんだ。そんなお前に、俺は隠し持っていたエロビデオを譲ってやる事くらいしか出来なかった。エロビデオ屋に堂々と入っていく事は俺の数少ない特技の一つだったからな。

そうだ、この話はお前も知らないだろうから書いておこう。その頃俺は携帯電話を持ちはじめた。その頃メル友っていうのが流行っていて、俺もそれをやっていた。どこの誰かも分からん奴と、

暇な時にメールで会話して楽しむんだ。俺はサイト上である女と知り合って、半年くらいメールを交わしていた。内容はまあ他愛もない話だ。勿論顔は知らないんだが、それをずっとやってるとどんな相手の女の妄想が膨らんで来て、どうしても会いたくなってきまう。たまたま家も近かったんで、俺は相手に会おうと切り出したある日の深夜二時頃、俺は家をこっそり抜け出して、彼女に会いにいったんだ。待ち合わせ場所に行くと、彼女は既にいた。いかにも遊んでそうな、所謂ギャルってやつだった。メールの文面では無垢な感じだったから、正直俺の想像と全然違っていてシヨックを受けた。だが大事なものは内面だ。そう思い直して俺は話しかけた。

「やあ、初めまして」

そしたら彼女、

「いくら持つてる？」

と抜かしやがった。その時の俺の所持金は千円と小銭が少しあるだけだったから、それを言ったら彼女、

「無理」

と言い残して逃げちまった。ハハ、今となっちゃ懐かしい思い出だが、その時は傷ついたもんだ。何せ半年かけて築き上げた妄想が一瞬で崩れ落ちたんだからな。帰り道、深夜の誰もいない田舎道を歩きながら、ポータブルプレーヤーでシヨパンの『別れの曲』を聴いた。あれは身に沁みたな。家に帰って寝室に戻ると、お前が安らかに眠っていた。その頃のお前には彼女がいて、よく家に連れて来てたっけな。そんな中お前の兄貴は夜も寝ずに女の尻を追いかけてかけずり回ってた訳だ。ここまで対照的だと笑えてくるな。

そんな事ばかりやっていた俺は、結局大学受験で失敗。浪人する事になった。予備校の講師は変わり者ばかりでいけ好かなかったが、授業はよほど役に立ったんだろう。一年後に、俺は無事に大学に入学した。偏差値もまあ高校の時よりはましな所だ。俺は大学に入るなり、やる事がなくなった。大学の授業なんて誰も出てないしな。そこで俺は、長らく遠ざかってたピアノを再開しようと思った

んだ。それでそういう音楽系のサークルに入ってみた。そこで思ったんだが、俺はやっぱり音楽が好きだったって事。ピアノを弾いていると、大学に入って良かったって思えたんだ。今まで頑張ってきた分、やっと報われると思ったんだ。人生の春が訪れたかに思えた。そんな矢先だ。同じサークルに、夏目さんという一つ年上の女の先輩がいてな。肌が白くて髪が黒くしなやかなロングヘアで、白いブラウスに黒いロングスカートを履いている様な清楚な美人だった。俺の通ってたヤンキー高校じゃお目にかかれなかったタイプだった。夏目さんは俺のピアノをいつも誉めてくれていて、俺はそれに気を良くして必死でピアノを練習した。何せ誉められた事なんて殆どなかったからな。つまりだ、俺は夏目さんが好きだった。俺は生まれて初めて恋というものを知ったんだ。性衝動ならそれまでも数えきれなくらいあったが、人そのものを好きになったことはなかった。自分に自信がなかった分、俺は必死でピアノを練習し、柄にもなくお洒落なんかにも気を遣った。しかしそうしているうちに心が苦しくなってきた。このまま気持ちを伝えられずに終わったらどうしよう、他の男の所に行ってしまったらどうしようと、不安で不安でたまらなかった。ある秋の夜だ。俺は強引に夏目さんを大学に誘い出し、遂に気持ちを伝えたんだ。が、結果は惨敗だった。人生そううまくはいかないもんだ。まあ傷つかなかったと言えば嘘になるが、その反面嬉しかった。俺にも告白なんていう男らしい行為が出来るんだってな。俺は二十歳を過ぎてようやく青春の甘酸っぱさを知った訳だ。だが俺はそのサークルに段々と居づらくなった。俺と夏目さんの一件が何故かサークル中に広まっていて、度々冷やかされたんだ。俺はたまらずサークルを辞めちまった。どうやらそれがトラウマになったらしい。それ以来、俺はピアノを触る度に俺の真剣な思いを笑いものにした奴らの顔が浮かんで来る様になった。そして俺はとうとうピアノを弾けなくなっちまったんだ。大学三年生の春頃だった。

そうこうしているうちに、もう就職活動の時期だ。就職と言って

も、俺には何の仕事をしていいか全く分からなかった。とりあえず片っ端からエントリーして面接を受けたんだが、これが全く駄目だった。俺にアピールするものなんて何も無いんだから、当然だ。それでも俺は根気よく面接を受け続けた。そうしたら一社にだけ内定を貰った。あるビルメンテナンスの会社だ。この仕事に興味などなかったが、そこしかなかったんだ。この頃は就職氷河期だったから、選択の余地なんぞない。そのとき俺は胸を撫で下ろしたが、今考えるところが間違っていた。いつそのこと就職に失敗して、お決まりのコースからドロップアウトしちまえば良かったんだ。

ちなみにお前は期待された通りに現役で東大に入ったな。すごい奴だ。俺が一浪でお前は現役。俺とお前は同級生になってた。お前は公務員試験に合格し、財務省に入った。俺の就職なんて完全に霞んじまったが、そんな事はどうでも良い。俺は自分の就職以上にお前が官僚になった事が嬉しかった。俺の弟が国を動かしていくんだと思うと、生きづらいこの国もちょっとだけ好きになれそうな気がしたんだ。もっとも俺が生きづらいのは国のせいじゃないがな。

ともかく俺は会社に入って働きた。勤務地が実家から離れちゃったが、仕事にも人間関係にも、特に不満はなかった。しかし俺は仕事に慣れていくに従って、次第にある恐怖に取り憑かれるようになった。このまま何十年としたくもない仕事を続けて、退職したら暫しの老後を過ごし、死んでいくのかと。そう思う度、俺は会社を辞めたくなくなった。辞めてまたピアノを弾きたくなくなった。いや、ピアノじゃなくても良い。とにかく好きな事をして人生を送りたかった。例えそれで飯が食えなくても、一度きりの人生、自分のやるべき事が他にある様な気がして、それを探したくなっただ。ただ、俺の銀行口座に給料が振り込まれたとき、とりわけボーナスが入ったとき、俺は思った。サラリーマンも悪くはないと。このまま気楽に生きていけば良いのではないかと。そうしてその気持ち次第に当たり前になって、いつの間にか俺は嫌気がさすほど保守化しちまった。俺はもう会社を辞める事は出来ない。でもこのまま死ぬま

で興味もない仕事をし続けるのは嫌だ。そんな葛藤を日々抱えながら今に至るといふ訳だ。

俺の話はこれで終わりだ。結局自殺の理由は何かって？それは今まで書いて来た事全てだ。人間は何も一つの事件のために死ぬとは限らない。確かに俺は出来なすで駄目な人生を歩んで来た。だがそれは自殺の理由じゃない。この歳で未だに童貞だからでもない。増してピアニストになれなかったからなんて事では全くない。理由はもっと本質的な所にある。

この国には身分制度がないと言う。職業選択の自由があると言う。命は自分のものだとも言う。それらは全て嘘だ。人間には生まれた時から暗黙の身分がある。その身分に応じて進学し、就職し、恋をし、結婚をする。そして国に税金を納めるために働き、更に未来の担い手を作るために子供を作る。そして用済みになれば死んでいく。人の命は国のものだ。わかるか？人間には生まれた時から見えないレールが敷かれていて、その上を歩いていく他生きる術はないんだ。それを踏み外す事が出来ないんだ。勿論踏み外した奴はいくらでもいる。だがそいつらの悲惨な末路はここに書くまでもないだろう。俺が自殺するのは、強いて言えばそのレールを踏み外せなかった事にある。何をやらせても駄目なくせに、他人の敷いたレールを捨てる事が出来なかった。あくまで世間の基準で自分を測り、自分は駄目な奴だと思ひ込み、本当にそんな風に生きて来ちまった。もう後戻りできない。俺はこれから与えられたレールを歩くしかない。世間が作り上げ、自分が受け入れた駄目人間のレールをな。俺はその事にとて耐えられそうにないんだ。

人間は死んだら無になつてしまふと言うが、出来る事ならあの世でまたお前に会いたいな。お前には世話になつた。ありがとう。それじゃあお先に。

\*

兄さん。先立つ不孝を許してくれ。単刀直入に言う。僕は死ぬ事にした。僕の死亡届を兄さんに出してほしい。僕の唯一の理解者で、目標だった兄さんに。死ぬ時になって、兄さんに迷惑はかけたくないが、こればかりは兄さんしか適任者がいない。僕は兄さんの様になれなかった。何故なのか。僕は何でも器用にやりすぎた。つまらない生き方をし過ぎた。自分の意志に従って生きる事が出来なかったんだ。僕には所詮人の言う事に従って、その期待通りに生きる事しか出来ないのだ。人からは何でも出来るとか、万能だとか言われて来たが、何でも出来るといふのはおおよそ何も出来ないといふのと変わらない。万能といふのは無能といふのと変わらないのだ。これは本当だ。人はいずれ死んで無になつてしまふのだから、何が出来るとか才能があるとか、そんなもの一切は無意味だ。言つてしまえば人間の存在そのものが無意味なのだが、だからこそ人間は生きて居る間幸福に生きなければならぬ。それも世間から与えられた幸福ではなく、自分の幸福を求めなければならぬ。だがそれは僕にはとても難しく、不可能なように思える。自分の人生を生きに来られなかったと言うべきか。そんな苦しみを理解してくれるのは兄さんしかいない様に僕には思える。兄さんの様な人間は、一人として僕の前には現れなかった。世間といふのはそのようなものだ。そんな世間から孤立して生きていく事には耐えられそうにない。だから死ぬ事にしたんだ。

ここに記すのは、僕と兄さんの思い出だ。と言つても自分の話が多くなるだろうが、兄さんに改めて僕という人間を知つてほしい。僕が覚えて居る範囲で記すから、多少の記憶違いがあるかも知れないが、これを読んで僕の事を思い出し、懐かしんでもらいたい。死んだ人間は無に帰すが、兄さんの中では無になりたくないんだ。

僕は幼少の頃から何にも興味を持ってない人間だった。虚しい、という感情以外は何も抱いた事がない。それだからか、人の言う事には何でも従つた。自分の意見とか主張といふものは何も持つていなかったから、それしか方法がなかったんだ。両親や学校の先生はそ

んな僕の事を誉めてくれたし、喜んでくれた。しかし彼らが喜ぶのは、そんな子供や生徒を持った自分自身に対してであって、僕に対して喜ぶべき素質を見出している訳ではない事に、僕はこの頃から気付いていた。誉められたい、良く思われたい、そんな虚しい願望を周囲の誰もが抱きながら限られた幸福を奪い合う姿に、僕は軽蔑の眼差しを向けていたし、何よりも彼らと寸分違わぬ自分を嫌悪していた。

そんな中、兄さんだけは違った。そんなものを嘲笑うかの様に生きていて、弟としてはその姿が頼もしく思えたものだ。覚えているかい？幼稚園の時の事だ。運動会でこんなゲームをやらされた。園児達が輪になって、輪の中の限られた玉を取り合うゲームだ。僕はこのゲームが世の中の縮図の様に思えた。人々が限られたパイを奪い合い、そのためには人の不幸も顧みない。そしてパイを得られなかった不幸な者を嘲笑する事で、自己の幸福を認識するのだ。そう言う世の中の残酷性がこのゲームにはあった。ゲームが始まる時、僕は心配だった。最初に玉を取れない者が必ず一人は存在する。彼はどのようなトラウマを抱えて今後生きていき事になるのかと、このゲームを企画した者の軽薄さを呪っていたんだ。しかし愚かな僕はそこまで分かっていながらも、最初の一人になる事は出来なかった。他の者にその役割を押し付ける事しか出来なかったんだ。全く卑怯な人間だ。結局、皆が玉をとり終えて再び輪になると、その中心に残ったのは兄さんだった。他の者が必死になって玉を奪い合っている時に、兄さんは一人土いじりに夢中だったんだ。これは僕の勝手な解釈だが、その頃から兄さんは世間の言う幸福というものに関心を向けていかなかったのではないかと思う。あくまで自己の幸福を追求していた。兄さんはその頃から偉大だった。兄さんは結局周りの園児や父兄から嘲笑を浴びたが、笑われるべきはむしろ彼らの方だと僕は思ったものだ。

小学校に上がると、世に言う出来不出来という概念がより明確になる。僕は必死で勉強したし、体力作りにも余念がなかった。だか

らどの分野に置いても人に負けた事がなかった。しかしそういう人間は孤独だ。周りから「出来て当たり前」と思われているため、誰からも応援されないし、結果を残してもあまり誉められない。そんなモチベーションを維持しながら努力する事は実に根気の要る事なのだが、誰もその苦しみを分かってくれない。学校の教師などは、「あなたは頭のいい子だから」と無条件に僕の努力を否定し、「何でも出来ていいわね」

と厭味だか皮肉だか分からない事を吐いてよこす。他の生徒のなかにも僕の事を良く思っていない連中が少なからずいたようで、僕は教科書や文具を隠されたりといった嫌がらせを何度となく受けた。そればかりか僕を相手に反論をする時は必ず数を頼んで応戦し、自己の正当性を主張した。誰かが僕と意見が対立したときは、必ずわらわらとその取り巻きが現れて、数の力で僕をねじ伏せようとしたし、時には大勢でわざとらしく泣いてみせたりして、そういう時は訳も聴かれずに僕が教師に怒られた。僕はその時気付いたんだが、彼らの様に集団の中でおおよそ中間層にいる人間というのは必ず自分より弱い者をいじめ、自分より強い者を数の力、あるいは権力者に頼って排除しようとする。そうやって自分の正当性を疑う事もなく主張し、自分たちこそ正義であると信じている。彼らは権力にすり寄る事を処世術と心得、群れる事を善とし、「普通は」「常識で考えれば」「世間一般では」といった言葉を好む。全く卑怯者の集団だ。そんな訳で集団の中での排除の空気というものを僕はひたすら嫌悪していたのだが、兄さんはそんなものを最初から相手にしなかった。考えてみれば、人間のそうした卑劣さなど自己防衛のために備わった本能であろうから、嫌悪したところで何の効果も得られない。相手にするだけ馬鹿馬鹿しいというものだ。兄さんはそれを教えてくれた。朝兄さんと一緒に登校すると、下駄箱で靴を履き替える時に何人かの兄さんの同級生が兄さんを罵倒し始めた。またこいつらは自分の正当性を主張したいがために拳って他の者と排除し

ようとしていたのかと、朝から吐き気を催した。我慢が出来なかった僕は言い返したが、黙って教室に入っていく兄さんを見て、すぐに馬鹿な事をしたと思った。どれだけ反論をしようとも、僕に勝ち目はないのだ。彼らは何しろ数が多い。それだけで彼らはその場の権力を握っているのだ。権力を握っている者に勝つ事など出来ない彼らも最初からそれを分かかって喧嘩を売って来ている訳だから、そんな誘いに乗ってはいけなかったのだ。事実その後教師が来て、

「上級生のお兄さん達にそんなこと言っちゃ駄目ですよ」

と僕を窘めていったんだ。教師ですらその場の権力には勝てないのだ。だから権力のない僕に全てを押し付けて決着をつけたのだ。やはり兄さんは賢かった。僕には兄さんの様に振る舞う事が出来なかったのだ。

そういう構図はクラスの中でも一緒だった。大抵学級委員長だとか、クラスのまとめ役といった誰も面倒くさがってやりたがらない役割を僕は悉く押し付けられたんだ。

「君なら出来るでしょ」

とかいう軽いノリでいつも押し付けられていた。中でも学芸会の時の事が今でも忘れられない。確か『ピーターパン』をやった時の事だ。主役のピーターパン役は一番台詞が多く、その上一人で歌も歌わなければならぬ。そんな役を僕は希望もしていないのに例によって押し付けられた。僕はそれを断る事が出来ずに引き受けたが、この後が大変だった。台詞は何とか覚える事が出来たが、歌なんて人前で歌った事もない僕がいきなり大観衆の前で歌わされる事になって、極度のプレッシャーに押しつぶされそうだった。そして本番当日、僕が歌う時に舞台から見たのは、恐ろしいほどの数の視線という視線だった。しかもその視線は僕にこう訴えていた。

「何でうちの子が主役じゃなくてあの子なの？」

「あの子目立つのが好きな子なのね」

「一人で歌うくらいなら、よっぽど歌に自信があるに違いない」

そんな視線を四方八方から浴びせられながら歌う事は苦痛でしかな

かった。結局僕は無事に歌い切つて事なきを得たが、特に誰の記憶にも残らないものだっただろう。親御さんたちは皆自分の子供にしか注目してないんだから、当然だ。だが兄さんはそんな中でも秀逸だった。例の

「ごもつとも！」

の一言だ。兄さんの卑屈なまでの演技で、会場はどつと笑いに満ちた。僕の長台詞や歌なんかよりもこっちのほうがよっぽど皆の記憶に残つただろう。

(やられた…)

とその時に思った。兄さんはやはり一枚上手だった。

中学に入つても、僕の優等生ぶり(自嘲を込めて言うんだが)は変わらなかつた。確かに何でも出来た。成績はトップをひた走つていたし、サッカー部では主将を努め、全国大会にも出場した。生徒会長なんかもやった。だが僕にはそれらの何一つとして興味がなかつたんだ。僕は当時、文学というものに惹かれていた。それまで僕は芸術というものに全く関心を持った事がなかつたんだが、芸術の中でもある程度論理性を保つた文学が僕の性分に合つていたんだろう。僕は少ない小遣いで本を買い漁り、国内外を問わずあらゆる文学作品を夢中で読んだ。僕はその内に文学者、とりわけ小説家というものに憧れる様になっていた。文学は良い。誰もが常日頃から何気なく感じ、それでいて見過ごしてしまっている大事なものを、文章の力で輝かせる事が出来る。それは学校の成績やスポーツでの活躍などよりもよほど価値のあるものに、僕には感じられた。だが世間というのは殊更芸術に対して冷ややかだ。芸術など役に立たないと彼らは言う。

「飢えた子供にパンとピカソの絵を与えたら、どつちを取る？」

等と言われた事もある。確かに芸術はそれだけで生命の存続に資する訳ではない。だが我々はパンのみに生きている訳ではない。飽食の時代にこそ精神的な栄養が必要だ。それが芸術であると僕は思う。あの頃の僕はそんな事を日々反芻しながら生きていた。もつとも一

度だけそれを主張する場があった。その時僕の主張はあっさりと退けられ、僕は自分の考えの浅はかさを理解したんだ。担任の教師との二者面談の時だ。

「君の成績なら、東大も夢じゃない」

と担任が言つて来たので、僕は胸の内を正直に伝えた。

「僕はそんなものには興味がありません。僕は小説家になりたいんです」

と言った。思えば親にも言つた事のない自分の夢を、この時僕は初めて口にした訳だ。だが、担任はこう言つた。

「君は優秀な人間だが、まだ世の中を知らない。そんな君の夢ははつきり言つて漠然としている。今君のすべき事は、勉強をして、世の中を知る事だ。夢を追うのはそれからでも遅くはない。夏目漱石も芥川龍之介も東大を出てるんだ。勉強して損をする事などない」

そう言われると、僕は言い返す事が出来なくなつた。僕が世間知らずである事は事実だからだ。そんな自分が価値のある小説を書ける訳がないと思つた。僕はその日から懸命に勉強をする様になつた。いつか小説を書けるように。それは今思えば、怖かつたのかも知れない。自分の才能のなさを見せつけられて、挫折してしまうのが怖くて、夢を先送りにしていたのかも知れない。そうでなければその時に小説を書き始めていたって良かったはずだ。それなのに夢中で勉強する事によつてそこから逃げていたんだ。だが兄さんは違つた。兄さんは学校生活など放り出してピアノを弾く事に明け暮れていた。ある日僕は兄さんに聞いた。

「学校の勉強はしなくて良いの？」

と。そしたら兄さんはこう答えた。

「俺にはこれしか出来ないんだ」

そんな生き方は僕には到底無理だつたけど、何度羨ましく思つたか知れない。いや、羨ましがる権利は僕にはない。そうしなかつた僕が悪いのだから。

結局僕は周りの期待に応える様に、県内でも有数の進学校に入学

した。僕はその頃から何もかもが虚しくなっていた。こうして周りの期待に応えるのはいいが、自分が本来の人生の目標に向かっていくのかどうか不安だったからだ。まず僕はサッカーを辞めた。本来何の意味も持たない「玉を上手く転がす技術の習得」がこの上なく無意味に思えたからだ。その頃僕には初めて彼女が出来た。友人に紹介してもらった別の高校の女の子だった。しかし正直言って、僕は彼女に何の興味もなかった。僕が彼女を欲しがったのは、やはり周りの期待に応えての事だった。「彼女がいない」という事はある種の偏見をもって差別され、とても肩身の狭い思いをするということだ。それは僕には堪え難い事だったのだ。第一、僕は女が嫌いだった。女は全ての男が自分のために生きていると思っただけだから自分に優しくしてくれ、またそういう力のある男にだけ存在価値を認める。だが僕に言わせれば、女に優しい男にろくな男はいない。想像してみてくれ。卵子の周りを泳ぎそこに入ろうとする無数の精子を。そこには熾烈な競争がある。それも力ずくの競争じゃなく、あらゆる打算のもとに陰険の限りを尽くした競争だ。そういう死闘に打ち勝つ為、男は女という権力者に取り入る事が上手くなる。それが男の優しさだ。そういう男は言うまでもなく用が済めばあっさりと女を捨てるし、また捨てられた女は

「あんなに優しかったのに」

等と言つて絶望する。僕は権力にすり寄る男も嫌いだが、それ以上にそういう行為を求める女の愚かさか嫌いだ。そんな女嫌いの僕が彼女を作り、あろう事か笑顔で家族に紹介までしていたんだ。差別されない為。自分の身を守る為。僕は自分が嫌悪している連中以上に卑怯者だ。その点、兄さんほど潔い人はいなかった。兄さんがモテなかったというのもあるだろうが（すまない）、兄さんはそれを大して気にもせず、あくまで自分の欲求に従って生きていた。一度兄さんがアダルトシヨップで万引きをして捕まった事件があったらどう？勿論犯罪に手を染めた事は愚かだが、人間それくらい自分の欲求に正直に生きるべきだ。外部から与えられた欲求では

なく、内側から湧いてくる欲求だ。少なくとも好きでもない女を自己防衛の手段として彼女にし、その彼女の純情を利用して処女まで奪った僕より卑怯者ではないはずだ。僕は彼女と初めて事に及んだ後、この上なく虚しい気分で、その場で泣き出しそうな心境だったんだ。その行為によって自分の中で何一つ満たされていなかったのだ。それどころか何か大事なものをなくした様な喪失感まであった。僕は結局「童貞」という差別用語で呼ばれる事を避ける為に彼女を利用したのだ。そのくせ僕は自分で手を汚す事を恐れ、アダルトビデオなどの類いはいつも兄さんから借りていた、目も当てられない程の臆病者だった。好きでもない彼女とセックスをしたのも、アダルトビデオが借りられないのも、結局は差別を恐れる僕の臆病さから来るものだったんだろう。兄さんは差別を恐れなかった。世間はそういう者を馬鹿と呼ぶが、僕にしてみれば差別を恐れる事の弊害を知らない者の方が馬鹿だ。

ともかくそんな僕は自己嫌悪に陥ったが、自分の夢だけを命綱に何とか生きていた。東大の文学部に入って、小説を書く事が僕の夢だった。その為に必死で勉強をした。ちなみに僕の高校の同級生には遊びほうけている連中もいて、彼らは必ずそれを自分の成績不振の理由にしていた。

「いやあ、高校入ったら遊んじゃってさあ」

等と言い、その上で真面目に勉強している者に

「青春を無駄にしている」

等と負け惜しみを言うのだ。彼らは中途半端に優秀であるがために、プライドが捨てきれないのだろう。だが僕にしてみれば所詮その程度の優秀さだったという事だ。僕はそんな彼らを反面教師にして勉学に打ち込んだ訳だ。

そんな努力が実り、僕は現役で東大に合格した。しかし入った学部が問題だった。東大には進学振分け制度というのがあって、三年生に進級する時にそれまでの成績や本人の希望に応じてそれぞれの学部に振分けられる制度があるんだ。僕は文学部志望だったから文

科三類を受験すれば良かったんだが、とりあえず文科一類に入っておけば振分け時に選択の幅が広がるという周囲の勧めで文科一類を受験し、あるう事かそれに合格してしまったんだ。今思えば馬鹿な事をした。文学部に行つて文学を学ぶ事が夢だったはずなのに、偏差値が高いというだけで違う道に鞍替えしてしまったんだ。この先の展開は兄さんも承知だろうが、僕は進学振分けの時に文学部に進む事が出来なかった。親や教授の期待を裏切る事が出来ず、選ばれた人間しか進む事の出来ない道にエリート意識をくすぐられ、何と僕は法学部に進学してしまった。文科一類の学生は法学部に進学するのが当たり前になっていて、そんな中で一人文学部に進学する事は、思っていたよりも勇気のいる事だったんだ。しかもその辻褄を合わせる様に、それまでやっていた文学サークルの同人誌の執筆から一切手を引き、官僚になるべく公務員試験の勉強を始めた。ある日学部の友人に進路について訊ねた。すると友人はこう答えた。

「官僚になる以外道つてあるの？」

とにかく周りがそんな空気で、そんな中一人だけ小説家を目指す事に、不安を感じていた。たったそれだけの理由で、僕は長年の夢をあっさりと捨ててしまったんだ。いや、もしかしたら僕の夢なんてその程度のものであったのかも知れない。周囲の期待に応えるためだけに生きる主体性のない人生に、ほんのわずかだけでも自分の意志を反映させた要素が欲しかっただけなのかも知れない。ただの操り人形である事を否定したかっただけなのかも知れない。だがそうだとすれば、僕の夢は周囲に対する反抗心から生まれたものであつて、本来自分が欲していたものではない。つまり僕は自分の夢すらも自分本来の欲求ではなく、外部からの影響による動機からもたらされたものだったんだ。小説が書きたかったのではない。僕は自分の意志で生きているのだと納得したかっただけだ。小説じゃなくても良かったんだ。しかもそういう事に、僕は大分前から薄々気付いていた。それなのに気付かぬ振りをして、自分は夢の為に努力しているんだなんて抜かしていたんだ。そういう自己欺瞞によって自分を安

心させて来ただけなんだ。

兄さん、僕が残念だったのは兄さんだ。兄さんは学生時代好きだったピアノを突然辞めてしまった。そして他の学生達と一緒に就職活動に励みだした。僕に偉そうな事をいう資格はないけれど、兄さんには自分の欲求に正直に生きてほしかった。そうも言っていられない事情は勿論分かる。人は生きていく為に働かなければならない。だが何の為に生きているかという問いに対して、僕と違って兄さんの場合しっかりと答えがあったはずなんだ。それなのにその最終目的を無視して、まずその手段から選ばなければならないのが現実だ。それを思うと、自由に生きている様に見えた兄さんも、もしかしたら本当に悩んだのかも知れないね。

さて、ここからは最近の話だから、兄さんも良く覚えているだろう。僕は公務員試験に合格し、財務省に入った。家族も、兄さんもまるで自分の事のように喜んでくれた。だが僕はその時既に無気力状態に陥っていた。国の財政がどうこう等という事は、僕にとっては実にもうどうでも良い話なんだ。こんな仕事を向こう何十年と続けなければならぬ。そして最後には用済みになり天下りという形で組織の外に出されるんだ。先が見えている。何の希望もない。おまけに働きだして分かったが、財務省というのは恐ろしく激務で、その上勉強しなければならぬ事が山ほどあり、自分の為の時間なんてとてもありはしないんだ。勿論小説を書く事など望むべくもない。かといって僕は今更財務省を辞める事も出来ない。僕は三島由紀夫の様に役所を辞めて創作に専念できるご身分ではない。僕は今や組織の中でしか役に立たない人間だ。

人の一生は酒に例えられると思う。水と麦を配合し糖化させ、発酵させる。これがビールだ。これを一度蒸溜すれば焼酎になるし、二度蒸溜して樽で熟成させればウイスキーになる。これに準えて言えば、僕は二度の蒸留を経ていながら、その後の長期熟成を経ていないニューポットだ。一通りの工程を終えたが、熟成されていないが為にアルコール度数が高すぎてとても飲めやしない。つまり僕は

これから長い時間をかけて人間としての円熟味を得ていくべきなのだろうが、僕はそれを拒んでいる。そうしたところで自分の目指した姿になれない事は分かっているからだ。ウイスキーにはなりたくない。かといってビールや焼酎には戻れない。そんなニューポットが相性の悪い樽に無理矢理詰め込まれて、果たして美酒が醸成されるだろうか？僕はそうは思わない。

兄さん、この国の人間には国家に尽くす義務がある。それはどうやら個人の幸福よりも優先されるらしい。国家総動員法という法律を知っているかい？今は廃止されているが、国民が総力を尽くして軍需を強化する事を義務化した戦前の法律だ。今は軍需でこそないが、この考え方自体はそう変わらない。学校の教育も、周囲の期待も、異性とくつつかなければならないという無用の圧力も、そしてそれらに抗う事が出来なかつた僕自身も、全てこの考え方に染まつたものであつたわけだ。僕自身に染み込んだこの考え方の為に、僕は自分の道歩く事が出来ず、ベルトコンベアに乗せられて運ばれる様な人生を送つて来た。そしてある事か、この国の行方などに関心のない人間が官僚になつてこの国を動かそうとしているんだ。実に馬鹿げた話だ。

冒頭に書いた様に、こういう自分の生き方が嫌で、僕は死ぬ事にした。兄さん、もしもあの世があるならば、僕は兄さんにまた会いたいと思う。僕も自由に生きられるかも知れないと、ほんの少しでも希望をくれた兄さんに。だからそれまで、兄さんも僕を忘れないでいて欲しい。今までありがとう。さようなら。

\*

二人はその後、命を絶つた。それぞれの家の郵便受けに手紙が届いたのは、恐らくその一日か二日後であつたろう。後日、二人の死亡届は二人の両親によって提出された。二人がお互いの遺書を読む事なく共に旅立つた悲劇に、両親は嘆き悲しんだ。

「あの子達はああ見えて、何か似た所のある兄弟でした」  
人にそう語る度に、二人の両親は涙ぐむ。

緑豊かな寺院の地下にある薄暗い集団墓地の中、二人の遺骨は今も隣り合わせで眠っている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7573r/>

---

死亡届

2011年3月21日12時09分発行